会議・視察報告 Conference Report・Inspection Visits

■環東海（日本海）国際シンポジウムat韓国江原道

ERINA調査研究部主任研究員　辻久子

環東海国際シンポジウム

2004年９月20－21日、韓国江原道平昌郡、龍平ドラゴンバレーホテルにおいて、「韓・中・日の国際シンポジウム：北東アジア時代における環東海地方政府間新交流・協力」と題された国際会議が開催された。本シンポジウムは韓・中・日における地方政府の国際交流協力の方向性を探ることを主目的とし、江原発展研究院創立10周年記念行事として開催された。シンポジウムには江原道と密接な交流を推進してきた中国吉林省と鳥取県の研究者、韓国内の専門家、地方政府関係者など約150名が参加した。国際会議の準備はすばらしいもので、韓中日３ヶ国語の同時通訳が用意され、韓・中・日の３ヶ国語に翻訳された発表論文が当日参加者に配布された。

会議の構成は、初日に基調講演に続いて２つのセッションが行われ、２日目の午前中に外国人参加者を含むコアメンバーによる総括会議で締めるという形を取った。

冒頭の挨拶に続いて、吉林大学東北アジア研究センターの張宝仁教授が「最近の中朝間の経済交流と協力の現状およびその発展傾向に関する分析」と題して基調講演を行った[注]。張教授によると、近年、中朝間の貿易・投資は増加しており、その背景には北朝鮮経済の緩やかな回復や、両国の密接な政治的関係がある。また、北朝鮮と米国・日本の関係が悪化していることを受けて、中国が北朝鮮への支援を代替している意味合いもある。しかし、北朝鮮との貿易では債務不履行が多く、中国も苦労している様子だ。将来の見通しとして、北朝鮮の改革開放は加速され、開城や新義州経済特区に外国投資を呼び込むことができるだろうと楽観的展望を述べた。

第一セッションのテーマは、北東アジアの地域協力である。座長は国土研究員の金原培氏がつとめた。

まず、私が「北東アジアにおける交流・協力の可能性と課題：『北東アジア経済会議』の経験を踏まえて」と題して発表した。15年間、14回にわたって新潟県が開催してきた「北東アジア経済会議」の試行錯誤の過程と成果、さらに地方レベルの国際交流の課題について述べた。

広島大学の戸田常一教授は「持続的な地域域経済開発と国際協力ネットワーク：地中海行動計画（MAP）の取り組みに学ぶ」と題して、地中海の海洋環境保全のための多国間協力の例を紹介した。MAPは国連環境プログラム（UNEP）の活動のひとつであり、沿岸20カ国とEUが主体となって進められている総合的地域環境保全プロジェクトである。地中海と同じように閉鎖的海域である日本海でも、経済発展に伴い海洋環境が深刻な問題となる可能性がある。

吉林大学東北アジア研究院の沈海涛氏は「中国東北地域の振興戦略と北東アジア地域の協力」と題して、中国政府が力を入れている東北振興戦略の概要を紹介した。東北振興政策の狙いは、東北地域が持っている優れた経済インフラや交通網、優秀な人材や生態環境を活用し、かつての産業基地である東北地域に新たな活力を与え、社会の安定を維持させようということである。さらに、日本・韓国などの北東アジア近隣諸国と共同開発することも提案されている。既に投資規模410億元に達する100のプロジェクトが批准されたが、財政・金融面での具体的優遇措置はまだ発表されておらず、待たれるところだ。

続いて、江原発展研究院の崔承業研究員より「北東アジア中心国建設計画と江原道の“Peace Sea Vision”」と題して、壮大な国家的・国際的ビジョンが発表された。それによると、韓国・盧武鉉政権は、「国家均衡発展」、「北東アジア経済中心国の建設」、「行政首都移転」を推進している。北東アジア経済中心国建設ビジョンでは、韓国が北東アジアにおける物流、IT、金融の中心となるという目標が掲げられている。国家計画の中で、江原道は国際観光・レジャー拠点として育成される計画である。視野を広げて、ヨーロッパの北海ビジョン（“Norvision”）に習った“Peace Sea Vision”なるものが提案された。しかし、提案されたビジョンはあまりにも壮大かつ抽象的で、限られた発表時間内に理解できるようなものではなかった。さらに、翌日の総括会議で、中国側から「北東アジア経済中心国の建設」ビジョンに対する批判が述べられた。その内容は、「なぜ韓国だけが中心なのか、中国だって中心になりたい、自分だけが中心だというのなら地域協力はできない」というものだった。日本としても同感である。結局、韓国側は当初の考えを推すことができなかった。

討論では、90年代からずっと環東海地域の地域協力が議

注　発表原稿を加筆修正の上日本語に翻訳して本号で紹介した。

論されてきたが、たいした成果が挙げられなかったではないかとの反省が指摘された。それについて、大きな構想を打ち上げるよりも、小さくてもできることからやっていくことが必要であるとの意見が聞かれた。

第二セッションのテーマは地域主導の国際的観光振興である。

とっとり政策総合研究センターの建井順子氏は「鳥取県におけるインバウンドの現状と課題：環日本海地域の相互協力による観光促進策」と題して発表した。鳥取県は歴史的遺産が乏しく、交通網も未発達で、国際観光誘致では遅れをとってきたが、温泉、大山、山陰海岸などを活用する方策を検討中である。また、新たな地域間交流の可能性として、体験型文化交流、映像の交流、食と健康に関する交流などを提案した。

吉林省長春市財政局の馮国臣氏は「吉林省の観光産業の現状に対する評価と考察」と題して、吉林省の観光発展の可能性について述べた。吉林省には長白山、高句麗遺跡、吉林霧松など魅力的観光資源が豊富で、環境保護と開発をともに重視する観光産業の発展を目指している。また、2007年には長春で冬季アジア大会が開催され、観光発展の起爆剤として期待されている。

江原発展研究院の李鳳姫氏は「江原道の外国人観光客の動向と環東海圏観光交流に向けての協力方案」と題して、江原道の観光の現状と課題について述べた。江原道は冬季の雪を売り物にしており、東南アジア市場を開拓している。雪を見たことの無い人々が数日間滞在し、スキーを体験するというものだが、滞在が短すぎて十分に楽しんでもらえないという問題がある。また、最近はテレビドラマ「冬のソナタ」が日本で大ヒットしたことを受けて、日本からの「冬のソナタ」ツアーが爆発的ブームとなっている。江原道を訪れる日本人観光客は昨年比10倍の伸びを記録中である。実際、会議場となったホテルでも、春川の町でも、「冬のソナタ」ロケ地をめぐる日本人女性団体客を数多く見かけた。韓国側は、日本人観光客を歓迎しているが、「冬のソナタ」ブームが去った後はどうなるのだろうという心配がある。

２日目の総括会議では、江原発展研究院の崔棟圭院長が全体をまとめ、今後も観光をメインテーマに、韓・中・日の地方研究機関でこのような国際シンポジウムを継続していくことを決定した。メンバーは韓国が江原発展研究院、中国が吉林大学東北アジア研究院、日本がとっとり政策総合研究センターとするが、北東アジア全体を研究しているERINAも参加を求められた。また、今後のシンポジウムではオープンな参加を認めていく予定である。

江原道の文化と観光

シンポジウムの前日、中国と日本からの参加者は江原道文化ツアーに案内された。ツアーは海外からの参加者をもてなすと同時に、江原道の文化財が外国人に受けるかどうかを試す意味合いがあった。19日朝、バスは春川を出発し、高速道路を南東方向へ向かった。

最初に平昌郡蓬坪の李孝石文学館へ案内された（写真１）。可山李孝石が愛した蕎麦や文学作品が陳列されている。日曜日ということもあり、韓国人観客でにぎわっていた。しかし李孝石の文学についてまったく知らない日本の文学音痴にとっては退屈な所だった。隣接のレストランで蕎麦料理などの昼食をとった。土産物屋で売られていた蕎麦とその加工品のパッケージに記されていた蕎麦の原産地は、韓国と中国半々だった。韓国ももはや蕎麦を自給できないのだ。

バスは東の江陵に向かった。日の出の名所として知られる江陵市正東津に韓国と日本の６人のアーティストが参加して建設した芸術公園、Haslla Art Worldを訪れた。ここは松の木をテーマとして、海岸沿いの山の斜面にテント作りの創作小屋や数多くの前衛的彫刻を展示した野外公園で、夜間はライトアップしているとのこと。日本人彫刻家に案内されて、ハイキングさながらの公園歩きを楽しんだ。高台から見る日本海は静かで美しかった（写真２）。

同じく江陵の歴史的建造物、船橋荘（Songyojang）では韓国式茶道を体験した（写真３）。日本の玉露茶を入れる手順を作法化したようなものだ。その後、茶菓子作りも体験した。あらかじめ用意された５色の菓子素材を木製の型に入れ成型する。韓国の座布団は薄いため、正座すると足が痺れそうになった。続いて船橋荘の芝生上に敷いた筵に座り、旌善アリランを鑑賞した（写真４）。農民が太鼓や台所の甕を叩きながら歌う牧歌的民謡のようなものだ。日が暮れてくると蝋燭の下、筵の上で韓定食の夕食をご馳走になった。最近少し薄くなったという韓国の焼酎と果実酒が合う。宴も終わりに近づいたころ、江陵の代表的郷土芸能、江陵官奴仮面劇が演じられた（写真５）。日本の神楽か能のように仮面をつけた役者が打楽器演奏に合わせてパントマイムを演じるというもの。色彩的に明るく、躍動感があって分かり易い。フィナーレでは私達も一緒に輪に入って踊った。役者の大半が女性だったのには驚いた。江陵は郷土芸能などの無形文化財の宝庫らしく、日本語の解説書やDVDを用意して観光客に売り込もうとしている。

今回のシンポジウムが行われた龍平ドラゴンバレーホテル周辺もすばらしい観光地である（写真６、７）。一帯はスキー場とゴルフ場がある大規模なリゾートで、ホテル、

写真１　李孝石文学館

写真２　彫刻と日本海

写真３　韓国式茶道

写真４　旌善アリランのパフォーマンス

写真５　江陵官奴仮面劇

写真６　龍平ドラゴンバレーホテル

写真７　冬のソナタの舞台となった喫茶店

写真８　ゴンドラで山頂へ

写真９　ゴンドラから見た龍平ドラゴンバレーの一部

コンドミニアム等が山間の村のように配置されている。四季を通じて楽しめるように工夫されており、私自身も紅葉の時期に再訪問してみたいと思った。実は平昌郡は冬季五輪に立候補したことがあり、次の2014年冬季五輪に再度立候補する予定である。そのための施設作りも予定されており、龍平はその冬季五輪の中心地となる予定である。２日間の会議終了後にはスキー用ゴンドラで山頂まで足を運び絶景を楽しんだ。山頂も「冬のソナタ」のロケ地だったそうだ（写真８、９）。

国際会議参加者に地元の観光地を案内するというのは単にもてなしとしてだけでなく、観光PRという効果も期待できるのではないかと思った。新潟の会議でもオプショナルツアーとして観光を組み込んでみたらどうだろうか。数年後に観光客という形で果実を享受できるかもしれない。

最後に、立派な国際シンポジウムを開催し、また、外国人参加者に心のこもったツアーを用意してくれた江原発展研究院の皆様に感謝したい。江原道の人たちが示してくれたホスピタリティーこそが観光誘致において重要な役割を果たすに違いない。